
許して下さい許して下さい

凌辱し太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

許して下さい許して下さい

【著者名】

Z0600Q

【作者名】

凌辱し太郎

【あらすじ】

みなちゃん、ごめんなさい。

「あ、兄貴……人生相談がね、あるんだケド……」

そう言つて俺の部屋に入ってきた桐乃。

「人生相談つて、まじかよ……？」

俺は先ほど桐乃から借りたエロゲーを終えて、いい気分だつたのに、あいつはまた厄介事を俺に持ちこんできやがった。

頼むから今だけは、何もない幸せを噛みしめさせてくれ……！

「……うん。あんただけにしか頼めない事……」

そんな俺の希望はあつさりと打ち砕かれた。

「そうかい。で、何の相談だ？」

妹がいるのに、妹を攻略するエロゲーをするという精神的苦行を乗り越えてきた直後というのは、なかなかに辛い。休ませてほしいものだ。

だが、俺にしかできない事つづーんなら、やつてやらなきゃダメだよな。いくら大つきらいな妹でもよ。

「……ん、えつとね……」

桐乃は扉の前から動かず、えつとねしか言わない。

何だこれは？ 今までの桐乃の行動を見てきた俺としては、今田の前にある光景は、ありえない光景だ。

それに妙にモジモジするし……気持ち悪いな。

「何だ？ トイレ行きたいなら行つてこいよ」

「そ、そんなんじゃない！ バカ……」

そんなことはわかっている。だが、何分もそのモジモジを見せられる側としては、嫌みの一つでも言いたいということだ。

それにしても……『バカ』て……

あんな可愛らしい『バカ』は初めて聞いたぞ。本当にどうしたんだ桐乃……？

「つだー、とりあえず入れよ。そんなところにいないでよ」
十分ほどその状態が続いたので、とりあえず部屋に入れることにした。

「…………ん

「つておい！？ 何でここに座る！？」

桐乃是そう言つと部屋に入つて、俺が用意した座布団に座らず、俺が座つているベッドに座りやがつた。しかも俺と密着するよつて。

な、なんだよマジで！？

「いいジャン別に……文句あんの？」

桐乃是捨てられた子犬のような潤んだ瞳で俺を見てそう言った。

……くつ！ 何だつてんだよ本当に。

「へいへい、わーつたよ。わかりました。どうぞお好きなところにお座り下さい」

俺はそんな桐乃に根負けした。

今にも泣きそうな顔で見つめられれば仕方ないことだろ

う？

「…………そう、ふふ

俺の言葉聞いた桐乃是、嬉しそうにほほ笑んだ。

本当に気持ち悪いな。エロゲーだったらここでイベント

CGに入るけどな。

「…………

「…………

「…………で、人生相談つてなんなんだ？」

それからまた桐乃是黙りだした。さすがに我慢できなかつた俺は桐乃から話し出す前に聞いた。

「…………

「おい、桐乃？」

それでも桐乃是ダンマリ。さすがにイライラしてきた俺

は、桐乃の顔を覗き込みながら呼んだ。

「……おいおい」

覗き込むと、桐乃は、目を固く閉じて、口を引き結び、顔をりんごのように真っ赤にしていた。

よく見てみると、身体も小刻みに震えている。

「いつ体調悪いのか？」

「おい、体調悪いなら」

「大丈夫」

「お、おう」

急にそんな返答が返ってきたので、情けないがびっくりしてしまった。

「なあ桐乃なんだよ？　おまえが言わなきゃ俺はわからんねえぞ」

俺がそう言つと、桐乃はやつと俺の方へ顔を向けた。

「じゃあ言ひケド、軽蔑しない？」

そつ言ひ桐乃の顔は、先ほどと同じように泣きやうな顔だった。

だからその顔はやめてくれ……。俺が悪いことしたみたいじゃねえか。

「ああ。もうさんざんすげーもん見せられたからな、軽蔑はしねーよ」

「ああ。もうさんざんすげーもんでもあんのか？」

「じゃあ言ひうね」

桐乃は俺の言葉に嬉しそうにほほ笑むと、真剣な顔になつて俺を見つめた。

「あたしね、あんたから返してもうつたPICOでHロゲーやつてたのね」

「ああ」

はあ、そつすか、みたいな感想しか浮かんでこない。

俺もなかなかに桐乃に汚染されてきていたようだ。

「それでね、やつてたんだケド、なんかいつもと違うなって思ったの」

「何が違かつたんだ？」

「なんか頭がぼーっとしてきてね」

そう言いながら、桐乃はただでさえ近いのに、俺に近づいてくる。

「お、おいどうしたんだ……！」

「でね、身体も熱くなつてきてね」

「おい……！」

桐乃は俺の制止も聞かずに体を乗り出していく。

「心臓もバクバクいってね」

俺の肩に手を置いて

「兄貴に会いたいなつて思つてね」

そのまま俺を押し倒して

「せつないの」

馬乗りになつた桐乃は、抱きついてきた。

「お、おい！ じりややばいんじやねえのー？」

「おいきり

「黙つて」

桐乃は俺の口に手を当てて、声を出せないようにした。

「スーサー、兄貴の匂い……」

「！」

桐乃は、俺の身体中の匂いを嗅いでいる。

俺は声を出せないし、もがいても桐乃が上にいるので抜けだせない。なんつー力出してんだお前！

「兄貴の匂い、もつと嗅ぎたい……」

桐乃は顔を真つ赤にして、とろんとした目をしている。

「兄貴の匂い……はあは……兄貴の匂い……」

桐乃は俺の口から手を離したかと思うと、俺のズボンに

手をかけ

「つはー、何だ夢かよクソ！…………つて夢精してやがる……」

ねがえり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600q/>

許して下さい許して下さい

2011年1月16日06時18分発行